令和４年度 日本大学文理学部付置研究所　所員個人研究費　研究実績報告書

所属・資格　　英文学科・教授

申請者氏名　　保坂　道雄

<table>
<tr><td colspan="2">研　究　課　題</td><td>言語変化と言語進化</td></tr>
<tr><td rowspan="3">報告の概要</td><td>研究目的および研究概要</td><td>近年、言語進化の研究は新たな展開を見せている。特に、生物言語学という新領域が生まれたことにより、生物学、脳科学、人類学、考古学等との学際的研究が一段と進み、国内はもとより（日本進化学会等）、国際的にも様々な学会（EVOLANG 等）が開催されている。しかしながら、言葉の変化を主要な対象としてきた歴史言語学とは、その研究姿勢に大きな隔たりが存在する。本研究では、言語変化もまた、言語進化の研究の一部として成立しうることを、動的な言語進化モデルを想定して提案する。なお、令和４年度の具体的目標は、英語の助動詞連鎖構造を対象とし、極小理論と認知言語学の理論に立脚して、その歴史的変化について考察を行うことであった。特に、本研究が基盤を置く動的言語進化モデルでは、言語の Conceptual Interface と Communicative Interface の双方の重要性が主張されており、生成文法と認知言語学のアプローチを統合できる可能性を有している。今回研究対象とする構造の変化は両理論にとって重要な言語事象であり、新たな研究の糸口を見つける手掛かりとなるものである。</td></tr>
<tr><td>研究の結果</td><td>本年度は主に、英語の助動詞連鎖構造の発達に着目し研究を行った。特に、古英語における助動詞連鎖構造の語順において、通常の主要部後続型の語順だけではなく、主要部先行型の語順が存在することを実証的に論じ、後期古英語において主要部先行型の語順が増加することを確認した。こうした点から、英語の助動詞構造は、これまで想定されていた以上に早く発達が始まり、その後の語順変化に大きな影響を与えたものと考えられる。また、本研究では、こうした英語史上の変化のみならず、その背後にある言語進化のメカニズムについても考察を行った。具体的には、言語はその文化進化の過程で、機能投射構造が段階的に進化して来たと想定されるが、英語におけるこうした助動詞連鎖構造の発達は、まさにこうした言語の文化進化の具体例と考えられることを論じた。</td></tr>
<tr><td>研究の考察・反省</td><td>本研究の目的は、言語変化の背後にある言語進化のメカニズムを極小理論と認知言語学の理論に立脚して議論することにある。今年度の助動詞連鎖構造の発達に関する研究は、極小理論に基づく構造がいかに進化して来たかを中心に考察を行った。こうした進化を駆動した要因に、Communicative Interface への適応が考えられるが、その点については、認知言語学的考察が必要である。今年度の研究ではこの点については深く考察することができなかったので、今後こうした側面からの研究もまた進めて行きたい。</td></tr>
<tr><td colspan="2">研究発表
学会名
発表テーマ
年月日／場所

研究成果物
テーマ
誌名
巻・号
発行年月日
発行所・者</td><td>＜研究発表＞
The Joint Conference on Language Evolution
"Word Order Convergence in the History of English"
2022 年 9 月 7 日 / 金沢文化ホール

日本大学英文学会 2022 年度年次大会
「理論の垣根を越えて：進化言語学からの新たな視点」
2022 年 12 月 10 日 / 日本大学文理学部

＜研究成果物＞
"*Habban* + Past Participle of an Intransitive Verb in Old English"
Medieval English Syntax: Studies in Honor of Michiko Ogura
2022 年 6 月
Peter Lang, 99-119
Tomofumi Akiha との共著

"Word Order Convergence in the History of English"
The Evolution of Language: Proceedings of the Joint Conference on Language Evolution
2022 年 9 月
300-301</td></tr>
</table>